

也。男波とは大。な。み。なり。め波とは小波也。われもとより其誤を信せず。あめつちの内などてか、
 るつねの理にたがひぬる事やあるべきとおもひしかば、かへりて後人にもかたり、其迷をさと
 さんため、わざと此濱邊にやすらひて、心をとめて久しく見侍りしに、いさゝか俗説のごとくに
 はなし、只よのつねの所のごとく、おなみ、めなみともに、いくたびもたち來れり、和歌の浦にしほ
 みちくればかたをなみと、古歌によめるは、俗説の意にあらず、しほみち來りて、瀉カクなくると云
 意也、其故あしべの方にてたづ鳴來れるといふ意明らかにきこゆ、萬葉第六卷に此歌あり、瀉カク乎無
 美とかけり、此文字にて歌の意明らかなり、乎ハはやすめ字也、しほみちくれば瀉カクなくると云意
 也。

〔萬葉集十三反歌〕

阿古乃海之荒磯之上之小浪吾戀者息時毛無

〔萬葉集十二古今相聞往來歌〕寄物陳思

登能雲入雨零河之左射禮浪間無毛君者所念鴨

〔古事記上〕此速秋津日子速秋津比賣二神、因河海特別而生神名沫那藝神那藝二字以音下效此、次沫那美神

那美二字以音下效比、次頰那藝神、次頰那美神〇下

〔古事記傳五〕故思に、書紀一書に國常立尊云々、天萬尊生沫蕩尊沫蕩此云沫蕩尊生伊弉諾尊と

ある、是はいと異なる一傳なり、かくて那伎に蕩字を書れたるは、平の義を取て詩に、魯道有蕩

のなり、水上の和たる意なるべし、或人もさて此に那美と對たるは、那美は水上の騒ぐを云言

にて、波と云名もそれより出たるなるべし、

〔古事記上〕故大國主神、坐出雲之御大之御前時、自波穗乘天之羅摩船而、内剝鸞皮剝、爲衣服有歸來

神〇下略